



2008年2月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646

2008年2月

第 66 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

小さな友達

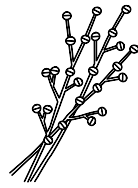


目 次

漢点字の散歩（5）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（62）（山内 薫）	5
本と人をつなぐ図書館員（山内 薫）	7
一 言（岡田健嗣）	9
酔夢亭日記（24）（酔夢亭）	11
見果てぬ夢を（9）（山本優子）	14
第9、10回「学習会報告」（菅野良之）	18
漢文のページ	21
漢点字講習用テキスト（初級編・第7回）	24
ご報告とご案内	25
編集後記（木下和久）	27

漢点字の散歩 (五)

岡田 健嗣



三 どうして? (承前)

どうして?

前々・前号と、なぜに我が国の視覚障害者の「識字」が、正面から問われなかったかを考えた。

先ず一般的に、これまで「識字」がどのように捉えられて、どのように取り組まれて来たかを見た。昨年の夏の読売新聞に載った「俳句教室」の紹介記事を用させていたしながら、「学校教育と識字」、「学校教育外と識字」について考えて見た。そこで分かったのは、「学校教育」と「識字」は、切っても切れない関係にあるということであった。そしてもう一歩踏み込めば、「識字」は一国の国力の指標でもあって、「識字率」がその国の教育水準と国力を表すと考えられているのである。そんな中で学校教育で「文字」を習得できなかった人々がいた。「文字」に対する人々の飢餓感とそれを強く希求する姿に思いを致しながら、直向きに学んでおられる人々の姿と、焦らずゆつくりと見守りながら手解きをされておられる教育関係

者の皆さんの努力に、心を打たれたのである。それは、単に日本という国家の国際競争力増強の目的ではない、もう一つの「識字」の力が、人々の生きる力と喜びを伝えて来たからにほかならない。「文字」は、国家の成立とともに発達し国家の存立を支えたが、同時に人の心の栄養となり力となり、それを豊かに育むものでもあったからである。もつとも古代の人々には、国家と個人の区別や対立などありはしない。むしろ言葉の力、文字の力、文章の力に、国家の行方を託していたのである。

前号では、視覚障害者が「文字」を我が物にするには、「触読」という方法を開発し求めなければならぬことを述べた。触読用の「文字」である「点字」の先進国である欧米の例を知るといふ観点から、「ドイツ語点字」の解説書の序文を引用してみた。そこにあったのは、その書物が触読文字である「点字」に関する解説書であっても、基本には、「ドイツ語」の解説も同時に為さなければならなかったという執筆者自身の言であった。ドイツ人の母語であるドイツ語の「点字」を解説するのであるから、ドイツ語に通曉していなければならない、それは考えて見れば当然なことである。そして(私の読める範囲で)英語もドイツ語も「点字」は、徹底的に「触読」を究めているように見

える。英語圏では「英語」、ドイツ語圏では「ドイツ語」という母語に肉迫し、〈触読〉は研究されて、〈英語点字〉や〈ドイツ語点字〉に結実しているように見える。

それに引き替え我が国では、〈点字〉は〈点字〉の専門家に任せておけばよろしいという默契があるようである。日本語を表す〈点字〉の議論の中に、我が国の標準的な「国語教育」を持ち込む例は、これまでになかった。〈点字〉は〈点字〉、〈点字〉の世界で充足しておればよろしい、そのように扱われて来たようである。

確かに日本語の〈点字〉の表記法の解説には、日本語文法に則っているような説明がある。しかしその文法の解釈と適用には、先ず「カナ点字」だけの表記ありき、「カナ点字」だけの表記であるのだから、「漢字仮名交じり文」は表現できないので考慮の外として、ローマ字の表記と同様の「品詞による分かち書き」の採用と、「品詞」を強調することによって、文法による説明としているのである。このような「〈点字〉では漢字仮名交じり文は表現できない」とするア・プリオリな解釈と説明は、今なお強い影響力を持っている。このようにして〈漢点字〉が証して来た、日本語の表記の神髄である〈漢字〉を、触読文字である

〈点字〉によって表される事実を、公式には未だ認めていない。むしろ、〈点字〉では〈漢字〉を表すことは不可能と、黙殺を決めているようにさえ見える。

触読とは？

〈文字〉が一般に広まったのは、それほど古いことではない。せいぜい数百年である。それ以前は、極めて限られた身分の、しかも著述となれば、さらに限られた知識人にしか許されていなかった。そんな中で視覚障害者が〈文字〉に触れる機会を得るようになるのは、一般の識字が進んでから後になる。〈文字〉は目で見て読むものであるが、しかし視覚といえども、本来は〈文字〉を読むための器官ではないのである。感覚器官の一つ、中でも最も分化の進んだ器官と言えるだけである。〈文字〉は、この視覚の能力に負って発達したのであって、〈文字〉の発達と視覚による読みの発達と、そして言語表現の発達のフィードバックが、現在の言語文化を築いていると言ってもよいのである。視覚障害者にとって、このような視覚言語を感じるのは容易いことではないはずだ。視覚で築かれた〈文字〉と感覚器官との関係を、触覚に置き換える努力が求められるからである。

前号でも、またこれまでに幾度か、「触読のメカニ

ズム」を考えて見た。私に知り得る英語とドイツ語の点字を参考に、〈点字〉のパターンを検証してみた。縦三点・横二列の六つの点の組み合わせ「⠠」を最小単位として、それを「マス」と呼んでいること、〈文字〉の組み立てとしては二マス「⠠⠠」を単位とすることが、触読にとつて最も適っていること、それによつて触読文字としての情報量を格段に増大させることに成功していることが分かった。「英語点字」と「ドイツ語点字」の検証からこのようなことが分かった。しかし触覚は普通、〈文字〉を「読む」ことには用いられない。視覚を失った者にのみ、〈文字〉を触知することが求められるのである。

視覚障害者の〈触読〉を考える目的で、中途失明者にある。ある程度の年齢、若くとも十代前半以降に失明した者が、〈点字〉（この場合は「カナ点字」）の触読に挑戦して、どのようにして読めるようになったかを尋ねてみた。私の予想では、徐々に読めるようになるのだらうと、安直に考えていた。努力の量が、そのまま触読の実力に結びつくものと考えていた。ところが答えは違っていた。

失明し、盲学校に入学して、最初に与えられるのが〈点字〉の教本である。目が見えなくなつたのだから、〈文字〉は指に触れて読むしかない、指先で読むには、〈点字〉という、触読専用の〈文字〉がある。ここまでは誰でもが知っていて、習得に努力するのが当然と思われることである。が、いざ指に「⠠」（め）に触れる。分からない。「⠠⠠⠠⠠⠠⠠」（あいうえお）に触れてみる。分からない。……延々と繰り返す。生徒も教師も必死である。繰り返し、繰り返し、繰り返し、……。この繰り返しのプロセスがどれだけ繰り返されたか、ある日突然、分からなかつた〈点字〉が、分かるようになったのである。おおよそこのような答えを得た。

これは何を意味しているのであろうか？
元々触覚は〈文字〉を読むようにはできていない。経験則から「⠠」、「⠠⠠⠠⠠」のパターンの〈点字〉であれば、触読できることが分かっているだけである。そして〈点字〉の学習とは、「⠠」や「⠠⠠⠠⠠」のパターンが〈文字〉であることを予め知っていて、「⠠⠠⠠⠠⠠⠠」を〈文字〉として触知したいと努力を重ねることを言う。

指先の触覚のレセプターは「⠠」や「⠠⠠⠠⠠」の点のパターンをパターンとして感知する。この感知も当初は決して容易ではないが、ともかく感知する。その情報知覚神経を通して頸髄に行き、大脳の指先の触覚

中枢に届く。この時点では「」や「」は「文字」ではない。しかし「文字」であるという予知はある。この予知が「何が「文字」なのか？」というバイアスとなつて、神経細胞に働きかける。こうして新たな軸索とニューロンの回路が形成されて、突然「分かる」ようになるのではないか？

実はこれは、触覚ばかりに起きていることではない。視覚も元来、「文字」を読むためにある訳ではない。視覚情報の処理のプロセスに「文字」が介入することですべてのことである。

幼少時に視力を失っていた人の開眼手術が成功した例が、生理学や心理学の教本に、事例として挙げられている。リハビリテーションの一つとして、図形の認知の訓練が行われる。「△、□、○」を見せて、それらをどのように認知できるまでの時間を計測したり、視線の動きを調べたりする。その図形を見せられた当初は、被験者の視線は辺や角を確認するように動いて、「△」を三角形、「□」を四角形、「○」を円と認識する。何回か繰り返し返すうちに、辺や角を確認することなしに、一挙に分かるようになるという。形や大きさの違う三角形や四角形も、一目で分かるのだという。

「文字」の場合は図形の認知よりずっと複雑である

う。「文字」を図形として認知した後には、「文字」と認知し言語と理解する。「文字」の認知は、「識字」の教育と同時に進行しなければならないこともあって、開眼手術直後の調査は不可能であろう。が、「文字」を図形として認知するところまでは、この調査に沿ったものと想像できる。

「点字」の触読にも、これと同様のことが言えるに違いない。ここで対象としているのはカナ点字である。極めて単純な構成であるので、教育にはさほどの手間はかからない。予知として五十音の「点字」のパターンを教えて、「読み」の前に「書く」ことから始める。これは予知をより確実なものにするためであつて、要件として欠かせない。

「触読」は、まず自分の書いたものから始める。自分で書いたものは、何が書かれているか予め知っている。それを触読するのであるから、記憶の確認の意味合いが強い。

そして次に読みの練習に入る。

「読む」とは、自分で書いたものを「読む」のではない。他人が表した言葉に触れることである。予見し得るものもあればできないものもある。これが「読む」ことの難しさであり楽しみでもあるのだ。

(続く)

点字から識字までの距離(六二)

山内 薫(墨田区立あずま図書館)

色について

今回は色について書いてみたい。よく「目の見えな
い人に色の話をしては失礼に当たるのでは？」と気に
かけている人がいる。そんな人には、「色というもの
も経験の蓄積によって、その人なりの色に対する感じ
方が形成されるものではないかと思うので、目の見え
ない方に対しては、むしろ積極的に色の話をする方が
よいのではないか？」と答えている。おそらく私が思
っている緑とあなたの思っている緑とは相当違うイ
メージをお互いに思い浮かべているのではないかと思
うし、現にふたりが同時に見ているある色を、全く同
じように認識しているという保障はどこにもないので
はないか？私の知人で若い頃世界の国々を放浪してい
た人が「アフリカで見るコカコーラの赤は日本で見
ると全く違う色に見える。」と話していたが、同じ
色が湿度など風土によって違う色に見えるのだらう。
図書館を利用なさっている全盲の方に聞いてみると、
「雪の白い色はよく覚えている」とか、「血の赤い色
は分かる」などと答えて下さる方もいる。また自分に
似合う洋服の色を決めている方も多い。そんなことも

あって、二〇年近く前、小学館から出版された『色の
手帖』(一九八六年刊)という本を点訳したことがある。
『色の手帖』には日本の伝統的な色名と現在一般
に使われている色名三五八色に、カラーの色見本と日
本の文献から採取された用例が添えてある。例えば
「瓶覗(かめのぞき)」という色は、淡い藍色で、藍
瓶にちよつと浸けただけの色を言い、ごくうすい青の
色見本が載っている。そして歌舞伎、滑稽本、樋口一
葉、秦恒平の4つの文献が紹介されている。樋口一葉
の引用は一八九六年の小説「われから」の中の「集ま
りし人だけに瓶のぞきの手拭、それ、と切って分け給
へば、一同手に手に打冠り」という一節である。この
藍瓶に浸けていつて濃くなつていく色を、順次「瓶
覗」、「浅葱(あさぎ)」、「縹(はなだ)」、「
藍」、「紺」と呼んでいるが、日本の染色文化を背
景に持った色ということが出来る。三五八もの色を区
別することはとても不可能で、例えば「黒橡(くろつ
るばみ)」と隣り合った「消炭色(けしずみいろ)」
はほとんど同じ色にしか見えない。色見本だけを取り
出して何色か当てる、と言われても、とても正しい色
名を答えられるとは思えない。

さて、古来日本語には色名として赤、白、黒、青の
4つしかなく、それも現在我々が思い浮かべる色では
なく、明暗を表す語と濃淡を表す語があっただけだっ
たという。(佐竹昭広著『萬葉集抜書』所収「古代日

本における色名の性格」も明暗のセットはアカとクロで、それぞれ明るい「アカシ」と暗い「クラシ」になる。濃淡のセットはシロとアオで、はっきりしているという意味の「シロシ」(著しいという漢字を当てる)あるいは「シルシ」(顕微鏡の顕、アキラカという漢字を当てる)と「アヲシ」(漠然の漠という漢字を当てる)又は「アワシ」(淡いという漢字を当てる)になる。従ってアヲは「本来は灰色がかった白色」を指す語であつたという。枕草子の有名な第一段「春はあけぼの、ようようしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲の、細くたなびきたる」の「しろく」は山の稜線がだんだんはつきりしてくる情景を表現しており、「あかりて」は明るく赤みを帯びてくる様子を表している。この「アカ」「クロ」「シロ」「アオ」の四語は植物や染料名など物の名に由来していないという特徴を持ち、現代日本語の中でも「あかい」「あおい」「しろい」「くろい」と「い」をつけて形容詞を作ることができ、「白さ」など、接尾語「さ」をつけることができる。また「あかあかと」「しらじらと」など重複型の副詞を作ることでもできる。さらに、この四色は特別な関係を持つており、シロとクロ、アカとアオ、アカとシロは互いに反対色になる。白と黒は、白星一黒星を始め、容疑者を指したりし、素人(シロウト)、玄人(クロウト)も白と黒の対である。赤と青は赤鬼一青鬼、赤紫蘇一青

紫蘇、赤信号一青信号など対をなす。赤と白も赤出し味噌一白出し味噌から、運動会の赤組白組などで対になる。こうした反対色を持つ色はこの四色以外にはない。「青信号はなぜアオなのか」という副書名を持つ『日本語の歴史』(小松英雄著、笠間書院 二〇〇一年)という本によると、青の付く複合語はそのほとんどが緑色を指している。青葉、青虫、青竹、青海苔などはみな緑色であり、青二才などのように未成熟であること、青畳のように新鮮であることをあらわし、必ずしも青という色に基づく命名ではないようである。こうした伝統的な用法に対して、伝統を離れた用法が青空ということになる。

ところで、いわゆる五色というときには、この四色に「黄色」が入るが、「き」という色は中国の五行思想に基づいた正色(昔、中国で、まじりけのなく正しいと定めた色)広辞苑第5版)であり、それをそのまま受け入れたもののようである。日本では「き」は赤と青の中間色として捉えられていたようで、方言を分類してみると、奄美以南では卵の黄身や菜の花は「アカ」であるのに対して、東北や関東などでは「き」はアオと言ひ、「菜の花はアオイ」とか黄色い蜂を「アオバチ」と呼ぶ方言が見られるという。「き」が西日本では「アカ」の部類、東日本では「アオ」の部類であつたとすれば、先の四色が基本色であるというシステムは崩れない。(柴田武「色名の語彙

システム」『日本語学』第七卷一号 一九八八年）緑も元は草木の芽を指す言葉で色名の由来も新芽からきているという。色感としては緑色の信号が「青信号」と呼ばれるのも、赤との対応で日本語としての自然な命名であるという。（前掲『日本語の歴史』）

（山内 薫）

『本と人をつなぐ図書館員―障害のある人、赤ちゃんから高齢者まで』

（読書工房 二〇〇八 定価一八九〇円）を出版して

今年の「月中旬に表記のような本を読書工房という出版社から上梓しました。読書工房という出版社は「誰でも気軽に読書できる時代を切りひらくため、2002年に設立された出版社です。『ユニバーサルデザイン』や『読書サポート』関連の書籍などを出版・販売しています。」（同社ホームページの案内文より）現在までに二〇冊程の本を出版していますが、その中には『出版のユニバーサルデザインを考える』という出版UD研究会の講演内容を再編集した本もあり、岡田さんの「漢点字を知っていますか」や私の「公共図書館における読書サポートの実際」も載っています。また、読書工房を設立した成松一郎さんは以前、株式会社大活字という出版社におられ、拙著『あなたにもで

きる拡大写本入門―広げよう大きな字』（一九九八）を出版する際にお世話になった方です。昨年初めに私の単著を出版しないかというお話しがあり、今まであちこちに書いた文章を読んでいただきました。その中には、この『うか』に連載している「点字から識字までの距離」に書かせていただいたものも含まれていました。最終的には編集を担当して下さった読書工房の村上文さんが、全体を読みやすいものにして下さり、何とか出版にたどり着きました。私が今までに書いた文章は、そのほとんどが図書館員に読んでもらうためのもので、図書館とは余り縁のない一般の読者を対象とする本を作るために、相当手を入れています。全体は九つの章になっていますが、実はもう一章書いたものがありました。それは古典鍼灸を勉強している視覚障害のヘビーユーザーに関するものだったので、結局その原稿は没になりました。

各章は次のような内容で構成されており、取り上げた内容は次のようなものです。

第一章 人はなぜ本を読むのか

未就学のために漢字の読めない脳性麻痺の女性

第二章 手で読み、耳で見る

生来全盲の男児

第三章 点字と拡大のはざま

点字と拡大文字の狭間にある弱視者

第四章 遠い記憶を呼びさますもの

高齢者施設の入所者

第五章 楽しめる本に出会えるように

授産施設の知的障害者

第六章 おはなしをからだで体験する子どもたち

おはなし会に来る乳幼児

第七章 かいじゅうたちのいるところ

身障学級（特別支援学級）の子どもたち

第八章 塀の中の写真集

刑務所内での読書の実態

第九章 読むこと、そして書くこと

読むこと書くことを求めて図書館に来館する人

例えば第八章の塀の中の写真集は、この「うか」の三七号と三八号に書いた千葉刑務所見学記が元になっています。

装幀はプロの装幀家にお問い合わせということで、三村淳さんが担当して下さいました。三村さんは数多くの装幀を手がけている装幀家で、星野道夫の本などの装幀をなさっています。最初の書名として考えられていたのは『本を読む人々』というものでしたが、装幀家がもつと本の内容を直接表す書名の方がよいということで『本と人をつなぐ図書館員』という書名になったのです。また当初は各章の扉に写真を使う予定で、第一章なら利用者から頂いた手紙、第七章なら私の作

成したジグソーパズル、第八章なら写真集の見返し等々用意したのですが、最終的に文字だけでいくということになりました。

この本を読んでいただいて、図書館というのはこんなこともやっているのだということを知っていただけたらと思っています。外から見た図書館は、一見貸本屋さんと変わらず、単に本を借りるところと思われるがちですが、帯にもありますように「すべての人に開かれている」図書館は読むことや来館することに困難を抱えている人たちにもサービスを提供する義務があると思っています。特に終章で取り上げた読むことや書くことの援助の問題は、地域に何故図書館という公的機関が必要なのかという問題を考えていただけたらと思つて執筆しました。あらゆる場面で格差が広がっている現代社会で、情報の摂取そして発信を少しでも公平に保障していく機関が図書館ではないかと考えている次第です。また図書館員という仕事が多岐にわたっており、やりがいのある仕事であることを知っていたいただき、図書館員になつてみようかなと思つて若い方が一人でもいてくれたら嬉しく思います。

是非お近くの図書館でリクエストしていただき、読んでもらえたらと思っています。また、この本に関するご意見や疑問点などを、この「うか」の誌上で交われば嬉しい限りです。

(山内 薫)

一言

岡田健嗣

ユニバーサル・デザイン



前号で、視覚障害者にも上下・裏表の分かる年賀葉書が手に入らなかったことを書いた。手に入れられなかったのは私ばかりでなく、私の周辺の視覚障害者は、誰もが購入できなかった。

しかしこのことは、私が本誌に書いた以外は、どのメディアも取り上げていなかった。（勿論全てを調べた訳ではないので、取り上げたメディアがあれば、大変失礼することになる。）

従って今年の暮れも、上下・裏表の分かる葉書は手に入らないのだろうと、ちょっと暗い気持ちになっている。

年賀状というのがどれほどの意味を持つのか、考えは様々だろうが、郵政会社にとっては、極めて大きな商売の機会である。それだけに昨年末は、民営化して初めての年賀葉書ということか、郵便局ばかりでなく、あらゆるところに出向いて、出張販売を行っていたようである。私は何時も、六〇〇枚程度を電話注文して届けていただが、このようなサービスは結構前から行っている下さっている。

私にとって年賀状は、一年に一度の挨拶と位置づけているだけで、それほどの意味はないと思っていた。習慣というより行事と言った方がよいほどに、意味はないと思っていた。

ところがここに来て、賀状のやり取りが消息のやり取りとなるが多く、やはり疎かにはできないと思う。このような習慣・行事を続けることを、私自身が望んでいるのであらう。

上下・裏表の分かる葉書とはどんな葉書か、再度ご紹介してみよう。

葉書の表とは、宛名を書く面である。その面には、左上に郵便切手に似たデザインが印刷されている。加えて「官製葉書」であることも表示されている。上下・表裏が分かるというのは、晴眼者にとってはこの印刷を見ることが言う。視覚障害者にとっては、この印刷を見ることができないので、この印刷は上下・表裏の表示とは言えないのである。

視覚障害者が外界の事情を認知しようとするとき、動員する感覚器官は聴覚と触覚である。葉書の上下・表裏を見分けるのに、聴覚を働かせるには及ばない。触覚で分かれば十分である。

触覚で上下・表裏が分かるようにするために郵政省は、葉書の表面の下縁の左端に、小さな切れ込みを入れた。この切れ込みが左手前に来れば、宛名の面に正

対する形になる。右手前に来れば、文面を書く面に正対する形になる。

果たして何時頃からこのようなサービスが始まったのか、私には確かな記憶はない。しかしもつと以前には、同様の細工を、私自身が手作業で行っていた。年賀状の時期には、先ずこの作業から取りかかった。

一般にはこの切れ込みのような細工を、「ユニバーサル・デザイン」と呼んでいる。しかし今回郵政会社に見つけたところ、このサービスは、視覚障害者を対象としたもので、一般の人には関係ないとのことであった。むしろ、この切れ込みを邪魔に思う人もいない訳ではないとも言っておられた。

さてそんなやり取りをしているうちに、私の身の回りで「ユニバーサル・デザイン」と呼ばれている、あるいは思われているもので、郵政会社というように、一般の人には関係ないものはないのだろうか？と変な気分になって来た。

「ユニバーサル・デザイン」という言葉は、健常者にも障害者にもどちらにも有効な機能のことと言われていて、その例に、シャンプーやリンスのキャップの形を変えることで、晴眼者がバスルームで頭を洗うときにも、手で触れて間違えないようなデザインのことという。こういうデザインなら、特別視覚障害者向けとしなくとも、一般の商品に生かすことで、コストの

削減になるのだから、大いに研究すべし、というものらしい。

言われれば誠に結構なのだが、そんなデザインが、それほどあるのだろうか？と斜に構えた気持ちになって来てしまった。

これは明らかに郵政会社とのやり取りの結果である。

幾つか葉書の切れ込みと同様の切れ込みを探してみた。あつたあつた、既に使う人のいなくなったテレホンカードである。この切れ込みは確かに最初からあつたらしい。公衆電話のカード挿入口に差し込むとき、カードの裏表と向きを、この切れ込みを目安に行うことで、間違えることがなくなるというのだろう。また切れ込みが二つあれば500円、一つなら1000円のカードと分かるのだそうである。

カード、外にはないだろうか？

私はスイカを使っているが、これにも裏表と向きを示すデザインが採用されている。

この二つは、恐らく視覚障害者向けではないのだろう。つまり、「ユニバーサル・デザイン」なのだ。

私が加入している健康保険は、国民健康保険である。その保険証は何年か前から、名刺判の大きさになった。また加入者ばかりでなく、その家族にも個別の保険証が配布されるようになった。この保険証にも切

れ込みがある。これは何だろう？

電話機のプッシュボタンの5のボタンに、必ず小さなポッチが付いている。パソコンのキーボードのfとjのキーにも印が付いている。この印は視覚障害者向けではないのだろうか？

ここまで来てハッと気づいたことがある。

いわゆる「ユニバーサル・デザイン」と言われている、視覚障害者にも共用できるとするデザインは、結局晴眼者も目を使わないで行う動作に配慮したデザインのことでないか？パソコンのfとjは、ブラインドタッチのキー入力には欠かせない設備であるし、電話の5のボタンのポッチやテレカの切れ込みは、パソコンほどではないようだが、それでも間違い易いと考えられているものなのだ。

以上は忙中雑感である。

酔夢亭読書日記(第24回)

酔夢亭

某月某日。妄言甚だし。



「紅一点論」斎藤美奈子（ちくま文庫）。

萬緑叢中紅一点。いわゆる紅一点。むさ苦しい男ばかりの職場に心なごます乙女がひとり。職場の花、マ

ドンナだ、癒やされる、かわゆいなどと鼻の下を長くしてにやにやとやに下がっているとセクハラになってしまうのでご用心。

男の意識にはそんな男尊女卑（かどうかしらないが）のロマンチズムがはびこっている。今どきの女性からおおいに反発されてしまう由縁である。

男と女の間には深くて暗い溝がきつとあるのでしょう、男が女に求めるものと、女が男に求めるものとはなんかやつぱり違うような気がする。

「わたしこの人のお嫁さんになりたいわ」通りすがりの雑踏の中でさつき耳にしたばかりの女性の会話である。そのうち「ぼく、この人のお婿さんになりたいな」と男の子も言い出すかもしれない。

男は雄々しく、女はしとやかに、という躰けのしかたは非民主的な考え方で、女のくせに、歩きタバコはするな、くしゃみするときは口を押さえろ、って言い方はいけないのだそうである。「女のくせに」っていう特定が駄目なわけでごわす。

こんな時代を生き抜くためには、年寄りのたわごとみたいなものをごちゃごちゃほざいていたら、馬鹿にされればよいほうで、しかとされて（存在なき者とみ

なされて）歯牙にもかかれなくなってしまう。

機を見るに敏にして、あちらでにこにこ、こちらでふんふん首肯し、氣に染まないことを鼓膜が感知しても聴かないことにしていればよろしいわけで、すべては馬耳東風、馬の耳に念仏。さういうひとにわたしはなりたいたい。なれるかなあ。

思うに、もともと生物的に男は弱くて（心もからだも）、女はその逆ではないのかしら？

こう考えるにはもちろんわたし自身男であるには違いないけれど、女よりも強いと思ったことはほとんどない、という人生の苦い実感に基づいているわけだ。

男が女にまさるものは、体格（図体の大きさ）と筋力（瞬間的暴力性）だけで、親あるいは社会共同体による躰もなく育てられると如何なることになるか、思い詰めた野獣は恐ろしいわけで、昨今のストーリー事件などをみていると男の女々しさはあまりに情けない。

まず、親は子を徹底的に可愛がり（基本に愛情がないことには始まりません）、その上で社会法を教えるべし、そのためには親たるもの犬猫の調教法を学ぶべし。

し。いわゆる、飴と鞭である。

結論、男は男らしく、女は女らしくという風に親は我が子を育てるべきではないですか、と保守反動的な言辭を弄したくもなる。

先刻も本屋さんで暴れまわっている「ガキ」に、こはそういうことをする場所か、となるべく優しくそう口調でにつこり睨んでやると、子どもはもぞもぞとして逃げていったが、お母さんの方はなんだこのじいえらそんな口きくんじやないよ、という表情をしていました。こりややつぱり子どもの責任ではなく、親の問題ですな。

いやあ、マジメになりすぎて胃が痛くなってきた。暴走老人が逆ギレして、暴れまわらないように自戒しなくちや。

某月某日。感傷甚だし。

「金融腐食列島」上・下（講談社文庫）、「亡国から再生へ」（光文社）高杉良。

小泉純一郎、竹中平蔵コンビがやらかしたことはとんでもないことだったのかもしれない。竹中平蔵なんて名前だから、先代松本幸四郎演じる長谷川平蔵みた

いな洩い人物を想像していたら、全然違っていて実物はとっちゃんぼうやみたいな風貌で、これはこれではなかなか親しみがもてるなあ、なんて好感をもっていたのですが…。イメージと中身の違いは往々あるもの、気をつけなくちゃ。小泉純一郎にしても、見方によれば、細身で、メタボリック症候群などとは縁がないようにみえて、好感が持てた。

しかし、エッセイストで作家で発明マニアでもある米原万里さんによれば、「貧相の薄ら笑い」にしか元首相はみえない。

一億総ざんげ、そんな言葉がむかし流行した。一億総中流化意識というものもあった。そんなむかしのことではないように思いますが、今から考えれば想像できないような意識です。

終身雇用制、年功序列社会。これが本当に悪かったのか、どうか。悪い面はいっぱいある。受験勉強を勝ち抜いて有名大学に入学できた、大企業に入社した、上級国家公務員になった、地方公務員になった、教師になった、親方日の丸になった、これで終生人生安泰。

若くして生活の不安から解放されると、女の場合はどうなるか分からないけれど、男の場合は大概、飲

む、うつ、買うに興味を持ちます。

こういう感覚に対する反感をうまく利用して規制緩和、市場原理、自己責任、などのフリーズがすぐ新鮮にみえたのだが。

日本型旧制度を否定して、アメリカン一辺倒になったとき、日本人の悪い面がどつと吹き出した。村意識とフロンティア精神は相容れないスピリッツではないのではないか？村意識とは横並び意識、みなが並ぶからわたしも並ぶ、この店のラーメン本当にうまいのかどうか、分らないけれど、とにかくみなが行列をつくっているからきつとおいしいのだ、みたいなイキとはいえない田子作的意識のこと、なんていうと怒られるかな？

イキとは色つぼさから立ちのぼる生き方の美意識みたいなものだと思うのですが、最近では、おつイキだね、かつこいいな、って感じる事例があまりにもなくなって、さみしい限りです。

衛星かぐやの月からの地球の映像、月の地平線から元旦の旦の漢字の如く蒼き水の惑星が立ちのぼっていく光景、これは感動的でその美しさに涙が出そうになります。我らの地球はかくのごとく美しいのに…。

以下次号

見果てぬ夢を（九）

山本 優子

十一 神戸訓盲院（承前）



神戸訓盲院の看板を掲げた家屋は、門構えのある二階建てで前庭もあった。玄関三畳と八畳三間は事務室、実習室、寝室に当てられ、二階の八畳洋間は教室に、六畳和室は寄宿生室に使われることになった。職員は二名。院長となった孝之進は、修身、国語、地理、歴史を、多聞教会伝道師の神名正子しんめいまさこは音楽（讃美歌）を、同教会伝道師の小林茂兵衛こばやしちげいが事務を手伝うということでは出発した。孝之進は建学方針を「治療家である前に教養人であらねばならぬ」とした。その信念のゆえに、普通科が重視されることになった。当時日本各地の盲学校のほとんどが盲生に鍼按の技術教育を授けることを動機として創設されていた中、一般教養にまず重点をおく極めてユニークな建学方針である。

孝之進は、「盲人勸学の歌」を作った。

一 我らの天地に月はなく 我らの世界に花はなし

されど 我らの心には 別乾坤の あるぞかし

二 見よや 検校保己一は 文の林に分け入りて

学者の誉かんばしく 世に伝わりぬ 今もなほ
三 杉山和一は鍼術の 奥義極めて將軍の 覚えめでたき侍医として 高禄食みしためしあり
四 また見よ 英国フォーセット 昇る位も大臣の名誉と共に始めたる 郵便法は 名も高し
五 人は我らを捨つれども かかる知名の先輩が立てしいさおを偲びては 何をか 憂い悲しまん
六 霊の花火を打ち上げて 学びの道にいそしまば文化の光鮮やかに 心のうちを 照らすらん
七 つとめ励めよ わが友よ 知能を磨き徳を積み御国のために 世のために 高きいさおを あらはせよ

松井牧師は、孝之進が慈善事業としてではなく、盲とされたのは主の栄光を現すため、という前提に立つて学校運営を進めていることを喜び、顧問として精一杯の協力をしたと申し出た。

翌一九〇六年（明治三十九年）四月には、後に神戸訓盲院院長となった森泰三を含む教員四名、生徒十六名を抱えるようになったことから松井牧師は教室、寄宿舎が足りないことを認識し、校舎新築の必要を多聞教会と他教会にも呼びかけた。

訓盲院はいわゆる「キリスト教主義」を看板に掲げた

わけではなかったが、孝之進が精神教育の基本としたのは聖書だった。孝之進は、毎朝始業前に礼拝を設けた。

聖書が読まれ、孝之進が短く話をした。多聞教会伝道師と訓盲院の音楽担当を兼任していた神名正子が讃美歌を教えた。朝ごとに聖書の言葉と孝之進の話を聴くうちに、ほとんどの生徒たちは心動かされ、盲人として生きていく人生の意味や目的を考え始めた。ある時、加藤儀平が、孝之進に尋ねてきた。

「先生、先生はなんでそんなに何でもようわかりはるんですか？」

孝之進は、おどけて言った。

「何でもよく噛んで食べるからだ」

「はあ、ほんまにそうやったんですか」

「いやいや、冗談だ。わたしは、何でもわかる者ではないよ」

「いえ、先生の言いには、人間の頭で考えつかへんようなことがいっぱいあるんです。どうやって、そんな知恵が出てくるんですか？」

孝之進は、笑った。

「儀平、わたしはもともと愚かな人間にすぎないのだよ。もし、おまえがわたしに知恵があると感じてくれたのなら、それはそっくり聖書からもらったただけだ」

儀平は真剣な声で言った。

「どうやったら、聖書から知恵をもらえるんですか？」

「聖書を読むことだな」

「はあ」

「早く、誰でも自分の点字聖書全巻を持てる時代にしなければならぬと思っているよ」

「先生、礼拝で読む聖書を使わへん時、貸してください。点字の練習も兼ねて写したいんです」

「残念ながら、わたしも点字の聖書をまだ持っていないんだよ」

実は、孝之進が礼拝で読んでいた聖書箇所は、毎日墨字の聖書を増江に読んでもらっては孝之進自ら点字で打ったものだった。教会にある点字聖書は新約聖書の一部だけだった。孝之進は、増江の目を借りて旧新約聖書全体を毎日丁寧に読んでいた。

儀平の熱意が嬉しくて、孝之進は自分が聖書箇所を点字に直したものを儀平に貸すことにした。儀平はどんどんそれを写し、孝之進は自分が打つスピードが追いつかなくなるのではないかと慌てたほどだった。

まもなく、儀平は自分の弟に手を引かせて、日曜日教会の礼拝に出席するようになった。若い儀平は、孝之進がすることは何でも真似、どこへでもついていきたかったのだ。

儀平は礼拝での説教に心打たれ、友人たちにも教会に行くことを勧めずにはいられなくなった。そして、実際多くの盲生徒たちが教会に行ってみたいと言い出した。それで、日曜日の朝は十数名の教会員たちが、喜んでその生徒たちの道案内をし、訓盲院の生徒たちがこぞって多聞教会に行けるようになった。社会との接点が限られていた訓盲院の生徒たちにとって、教会は驚くべき場所だった。ほとんどの生徒たちはそれまで他人から、家族からさえも大切に扱われたことが無かったし、厄介者、汚いもののように接されていただけに、教会の人たちの背後にある聖書の力を認めずにはいられなかった。盲生徒たちにとって教会での交わりは何よりも楽しい時となっていた。儀平は、その年の九月に洗礼を受けた。続いて十一月には三名の盲生徒も洗礼を受けた。以後訓盲院生の中で信仰告白をする者が次々に出てくるようになった。

松井牧師家族と教会につながっていた訓盲院生を含む数名の信徒たち、孝之進、増江、母千代は訓盲院のために集まって祈りあうようになった。一九〇四年から一九〇五年（明治三十七年、三十八年）には、孝之進宅で聖書の学び会が定期的に持たれていた。その集会には、訓盲院生中心に地域の人たちも参加するようになっていった。母千代が自宅を開放して持たれるようになった婦人

の聖書学び会も好評だった。「神の業を顕すため」盲とされたことを本気で感謝し、祈りを持って行動している孝之進の姿に憧れた生徒たちは競い合うようにして聖書を点字で写し、聖書の言葉を暗誦した。その生徒たちそれぞれがいつの間にか明るく前向きになっていくのに家族も周囲の者も気づき、驚くようになった。

十二 恵子

夏の暑さも一段落した一九〇五年（明治三十八年）九月半ばのことだった。孝之進は増江の肩に鍼を打ってやっていた。最近では増江も疲労がたまっているらしく身体の節々の痛みを訴えることがあった。孝之進は、わずかも時間を作っては増江に治療をするようにしていた。近所の子供たちが遊んでいる賑やかな声が障子越しに聞こえる。

「かーごめ、かごめ、かごの中の鳥はいついつでやる
……後ろの正面、だあれ」

「ハナちゃんやろ」

「ちゃう、ちゃう」

「ほんま？ ハナちゃんちゃうん？」

「ちゃう、言うとうやんか」

「まっちゃんや」

当たったらしく歓声があがった。

神戸弁の元気な声だ。孝之進は心がなごむ。と同時に、このような遊びに加わったこともなく、狭い一室に閉じ込められたまま、一生を終えようとしている盲児がすぐその家にもいるかもしれないという思いがよぎる。心の底から、熱い思いがこみあげてくる。

ふいに増江が言った。

「私たちにも子供がいたらねー」

孝之進は、治療に専念しているふりをしていた。しばらくしてまた増江は、言った。

「でも、訓盲院には小さい子からわたしより背の高い子供までいるんですものね。わたしたち、日本一幸せな親なのだよ」

「ああ、そうなんだ」

孝之進は、このごろ増江は故郷の言葉をあまり使わなくなつたなあと、別のことを考えようとした。

そのとき、一人の弱視の生徒が入ってきた。

「先生、郵便です」

孝之進は、治療を続けながら言った。

「開封してくれるかな。後で読んでもらうから」

「今、読みますよ」

増江は、うつ伏せに横たわり治療を受けながら、手紙に目を通した。

「コウさん、またよ。訓盲院を盲児の孤児院だと思っている人からの入所願い」

増江は、孝之進に読んで聞かせた。

差出人は中山手通（なかやまてどおり）の進藤かつという女性だった。恵子という盲目の子を遠縁にあたるということで、養女にした。しかし、家庭の事情で手元におけなくなつたので、訓盲院で預かってほしいという内容だった。盲児を訓盲院で学ばせるためではなく引き取ってほしい、という依頼はこれまであちこちから来ていた。孝之進はそのたびに依頼者と時間をとって話し合いをした。盲児、盲人も学問の機会が与えられれば教養を身につけ、立派に社会で生きていくのが可能なこと、その必要があることを孝之進が熱い思いをこめて話すと、ほとんどの依頼者は感銘を受け、訓盲院に預けるのではなく、教育してもらいたいと頼み込むのだった。

「進藤さんという人とも話し合わなくてはならないな」

孝之進が治療を続けながら言うと、増江はうなずいた。

「一組の理解者が増えるってことは、その人たちからまわりに広がっていくということですよものね」

進藤かつも商売が忙しいということで、孝之進たちと面会する日がなかなか取れなかった。それでも十月に入つて訓盲院をたずねてきた。

（つづく）

二〇〇七年一二月、二〇〇八年一月に行われた、東京漢点字羽化の会の漢点字学習会の様子を、会員の菅野さんがお寄せ下さいましたので、掲載させていただきます。

第九回 漢点字 学習会報告

菅野良之（東京漢点字羽化の会）

- 1 日時 平成19年12月22日(土) 18:30～20:30
- 2 場所 ヒューマンプラザ七階 第一会議室
- 3 出席者 (省略)

4 使用教材

「漢点字 講習用 テキスト 初級編 第一回 (全十回)」点字編、墨字編

「レーズライター」(店、月、肉、分、日、性、心、口、囲、十、止、必、才、正)

5 学習会内容

(1) 第八回の復習 第一基本文字(一マス漢点字)(三)ナ行の文字…

ヌ(1・3・3・4の点) 「力」(ㇰ)

ネ(1・2・3・4) 「示」(ㇱ)

ノ(2・3・4) 「私」(ㇽ)

*「示」は示偏、「私」はノ木偏として用いる。ハ行の文字…

ハ(1・3・3・6) 「走」(ㇺ)

ヒ(1・2・3・3・6) 「進」(ㇻ)

(3・4・5・6) 「火」(ㇼ)

フ(1・3・3・4・6) 「女」(ㇾ)

*「走」はそうによう、「進」はしんにようとして用いる。「進」は人が動く姿を表す。「火」は炎が燃え盛っている様子を象ったもの。

(2) 第九回の学習内容

ハ行、マ行の一マス漢字 点字 p 81、墨字 p 28から

・ヘ(1・2・3・3・4・6の点) 「玉」(ㇼ) 常用字

解では魂が元とある。たましいにはほかに霊、魄の字がある。霊魂は清い魂。玉は価値の高いもの。

たま偏、おう偏として使われる。理、珍、珈琲、珊瑚、班、球、現など。

・ホ(2・3・3・4・6) 「方」(ㇼ) 常用字解では上

の部分が木の枝、下の部分が死んだ人の身体を意味している。方は、正方形・長方形というように四角い形の意味で、集落のはずれの木の枝に遺体を吊るし、魔物から集落を守る。

ほう偏、かた偏として、放、芳、紡、訪、族、旅、遊、坊、房、防等多数

・マ (1・3・5・6) 「石」(⬢) 常用字解では雁垂れと口からなり、雁垂れは切りたった崖で、崖は神様が降りてくる所、口はサイを捧げた形。

岩は大きな石を表す。

部首は石偏で、研、硬、硯、砲、破、砂、砥、砕、砦、砌 等多数。

・ミ (1・2・3・5・6) 「耳」(⬢) 常用字解では聖(ひじり、神様の声を聴く人)からきた文字。

ほかには、あやふやなことの意味もある。

耳偏として、聞、聴、取(つくりの又は手の形、戦で相手を殺した戦果として相手の耳を切り取った)、恥、職、聡、聾、聚など

・ム (1・3・4・5・6) 「車」(⬢) 戦車(教材の荷車は誤植)を象った文字。

車偏として、転、輪、軸、斬、輪、較、運、庫、軍(車の上に旗がなびいた様子)、軒、軽、輝、輶など多数。

・モ (2・3・4・5・6) 「門」(⬢) 両開きの出入り口。戸は片開き。

部首は門構え。悶、問、閑、開閉、閣(高殿)、門、閑、瘤など多数。

(3) その他

① 横浜羽化の会新年会への参加者は1月10日までに岡田さんへ申し込む。

② うか 第65号 2007年12月の配布

第一〇回 漢点字 学習会報告

1 日時 平成20年1月26日(土) 18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ七階 第一会議室

3 出席者(敬称略) (一)内はヘルパーの方

事務局 岡田、斎藤、田中(江藤)

学習会 風間(江島)、森原、渡辺(清水)、

竹井(菅野)

羽化の会 秋野、江島、杉田、菅野 以上13名

4 使用教材

「漢点字 講習用 テキスト 初級編 第一回

(全十回)」点字編、墨字編

「レーズライター」(店、月、肉、分、日、性、

心、口、囲、十、止、必、才、正)

5 学習会内容

(1) 第九回の復習

第一基本文字(二マス漢点字)(3)

八行の文字…

へ(1・2・3・4・6の点) 「玉」(⬢)

マ行の文字…

マ(1・3・5・6) 「石」(⬢)

ミ(1・2・3・5・6) 「耳」(⬢)

ム(1・3・4・5・6)「車」、(⦿)二輪車を上から見た形。縦に長い線は車軸を表す。

モ(2・3・4・5・6)「門」、(⦿)門構えとして多くの字がある。

(2) 第一〇回の学習内容

ヤ行、ラ行の一マス文字 点字 p94、墨字 p32 から

・ヤ(3・4の点)「病」(⦿) 病垂に一、人、口

(えん構)で体を象っている。 丙は十干(甲・乙

・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸)の丙(ひのえ)にあたる。十干は十二支とあわせ干支(えと)と称する。

音読みのビョウは呉音、ヘイは漢音。ヘイは疾病(しつぺい)に使われ、疾は急性病、病は慢性病を意味し、いずれも病気をいう。

病垂…痛、痘、瘡、症、疸、疹など

・ユ(3・4・6)「行」(⦿) 音読みのコウは漢音、ギョウは呉音、アンは唐音。

元々は左右同形。行人偏、行構え(左右の間に文字が入る)に使われる。

行人偏…彷彿、役、往、彼、佛、律、後、待、徐、御、微など。

行構え…術、街、衝、衛、衡など。

*テキストにある行方(ゆくえ)は氏名では「なめかた」と読む。

アンの読み方には行脚(あんぎゃ)、アンドン行灯(行燈)がある。

・ヨ(3・4・5)「店」(⦿) 常用字解では物を置く場所。建物内の一部に物を置き、並べたことから、商店として物を売買する所に転じていった。

漢点字では广垂れ(まだれ)に使われる。

广垂れ…広、庄、序、床、底、府、庭、麻、庁、座、康、庶、庫など。

・ラ(1・5)「月」(⦿) 音読みのゲツは漢音、ガツは呉音。中国から入ってきた文字の読み方は時代順に「呉音」、「漢音」、「唐音」と呼ばれる。

「明」の日は窓の意味で、窓から月の光が入ると明るいことからきている。

月の付く字…朋、朔、脅、朝など。

・ラ下がり(2・6)「肉」(⦿) 肉の切り口の形からきた。部首は肉月。身体や食物に関する文字に使われる。胸、肺、胃、腸、腰、臓、肝、胆、脳、骨、筋、脚、肘など多数。

五臓(肝臓、心臓、脾臓、肺、腎臓)、六腑(大腸、小腸、胆、胃、三焦、膀胱)。

(3) その他

① 横浜羽化の会では常用字解を漢点字で作成中。

② 2月の学習会は23日(土)、3月は22日(土)各18時30分より。

白居易

六廻^ラ一^シ天^テ養^ハ楊^レ御^テ漢^ニ
宮^ノ眸^ヲ朝^ニ生^リ在^ニ家^ニ宇^ニ皇^ニ
粉^ニ一^シ選^バ麗^レ深^レ有^リ多^シ重^シ
黛^ニ笑^ス在^リ質^ニ閨^ニ女^ニ年^ニ色^ヲ
無^ニ百^シ君^ニ難^シ人^ニ初^メ求^ム思^フ
顔^ニ媚^ニ王^ノ自^ラ未^ダ長^レ不^モ傾^レ
色^ニ生^ジ側^ニ棄^テ識^ラ成^シ得^ニ國^ヲ

『長恨歌』白居易（白樂天）作、七言百二十句からなる長編の詩。漢の時代を借りて、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いている。掲載部分は冒頭の一節。長年美女を探し求めていた皇帝は、楊貴妃を見出す。その魅力に他の女官達は圧倒されてしまった。

漢皇色を重んじて傾国を思う

御宇多年求むれども得ず

楊家に女有り初めて長成し

養やしなわれて深しんけい閨あに在ひといまり人未しだ識しらず

天生の麗質自ら棄て難し

一朝選ばれて君王の側に在り

眸ひとみを廻めぐらして一笑いつしやうすれば百媚ひやくひしやう生じ

六宮の粉黛顔色無し

御宇＝天子が位についている間。治世の間。

難_二自棄_一 Ⅱそのまま世間に知られることなく

捨ておかれるようなことはない。

一朝ある日。にわか。

六宮 天子の後宮。

粉黛 〓 おしろいとまゆずみ。

化粧をこらした女官たちを

指す。



楊貴妃



長 恨 歌 、 ちょう ごんか

盛 唐 白 居 易

漢 皇 重 ン ジテ 色 ヲ 思 フ 傾

國 ヲ

御 宇 多 年 求 ムレ ドモ 不 得

楊 家 ニ 有 リ 女初 メテ 長 成 シ

養 ハレテ 在 リ 深 閨 ニ 人未 ダ

識 ラ

天 生 ノ 麗 質 難 シ 自 ラ 棄 テ

一朝 選 バレテ 在 リ 君 王 ノ 側

ニ

廻 ラシテ 眸 ヲ 一 笑 スレ バ 百 媚

生 ジ

六 宮 ノ 粉 黛 無 シ 顔 色

参照図書：遠藤哲夫『語法詳解 漢詩』（旺文社）より、
多くを引用させていただきました。



漢点字講習用テキスト

初級編 第七回

3 複合文字 (1) (前回の続きです。)

※ 「𠩺」(ウ冠)を部首として含む文字。(つづき)

・「完」とそれを含む文字。

(20) 完 𠩺 𠩺 カン ガン まっとう - する おわ - る

「𠩺 𠩺 𠩺」の下に「元」を置いた形の文字です。家の中がしっかりとしていることを表しています。屋根の下に、強い絆で結び付いた家族が、充実した生活を営んでいることを意味しています。漢点字では、「𠩺 (ウ冠)」に「𠩺 (元)」で表します。

「完全」「完了」「完璧」「完済」「完結」

(21) 院 𠩺 𠩺 イン かき

「こざ」と𠩺 𠩺 𠩺の右側に「完」を置いた形の文字です。大きな屋敷に巡らされた垣根を表しています。さらに、垣を巡らした大きな庭と建物をも意味するようになりました。平安時代には、退位した天皇が、権力を保持し続けるために、「院」と呼ばれる建物に入って、政治を動かし続けました。これを、「院政」と呼んでいます。現在では、公共の目的を持った建物を意味するようになっています。漢点字では、「𠩺 (こざと偏)」と「𠩺 (完)」で表します。

「病院」「産院」「大学院」「美容院」「衆議院」「参議院」

※ 「𠩺」を部首として含む文字。

(22) 軍 𠩺 𠩺 グン つわもの

「𠩺 𠩺 𠩺」の下に「車」を置いた形の文字です。「車」は、戦車のことで、戦車を連ねて戦う姿を象っています。漢点字では、「𠩺 (ワ冠)」に「𠩺 (車)」で表します。

「軍隊」「軍票」「軍旗」「陸軍」「海軍」「空軍」「正規軍」

※ 「十」を部首として含む文字。

(23) 計 𠩺 𠩺 ケイ はか - る はか - らう

「言偏」に「十」の形の文字です。数を数えたり、ものごとを考えたり、考えを組み立てたりする意味を表します。また、数量を量る道具や装置も表します。漢点字では、「𠩺 (𠩺偏)」と「𠩺 (十)」からできています。

「計算」「計画」「計略」「合計」「総計」「時計」「体温計」

(24) 早 𠩺 𠩺 ソウ サ はや - い はや - まる はや - める

「日」の下に「十」の形の文字です。未明の、薄暗い早朝を意味しています。日がやっと顔を出したところです。漢点字では、「𠩺 (𠩺)」



に「𠂔」（十）」で表します。

「早朝」「早春」「早晚」「早速」「早苗」「早稲」「早引け」

(25) 協𠂔𠂔𠂔 キョウ かな - う あわ - せる

「十」に「力」を三つ三角形に置いた形の文字です。大勢の人が力を合わせて、一つのことを行うことを意味しています。漢点字では、「𠂔（十）」と「𠂔（力）」で表します。

「協力」「協同組合」「協議会」「漢点字協会」

(26) 直𠂔𠂔𠂔 チョク ジキ す - ぐ

なお - い なお - す ただ - ちに

「十」の下に「目」を置き、その左下をし字型の線で囲った形の文字です。直接、真っ直ぐ、直ちにの意があります。漢点字では、「𠂔（十）」と「𠂔（目）」で表します。

「直面」「直接」「直線」「直球」「直立不動」

(27) 朝𠂔𠂔𠂔 チョウ あさ あした

この文字は、左側、縦に「十日十」として、右側に「月」を置いた形です。左側は元、草の葉の間から朝日の昇る形を表したものでした。また右側の「月」は、元は「月」ではありませんでした。一日の始め、「あさ」を意味しています。また、朝満ちてくる潮のこともいみします。「一朝」と言って、何かの出来事や、仕事に向き合う、また、中国や日本の政治の中心、「王朝」、「朝廷」を指します。漢点字では、「𠂔（十）」と「𠂔（月）」で表して、「日」は省略されます。

「朝食」「朝刊」「朝廷」「王朝」「明朝体」「一朝一夕」「朝湯」「朝寝」

・「世」とそれを含む文字。

(28) 世𠂔𠂔𠂔 セイ セ よ

元々は「十」を三つ並べた形、「三十」を表す形の文字です。親が子供を育て上げる年月、一世代三十年を意味しています。漢点字では、「𠂔（十）」と、訓の「よ」の「𠂔」からできています。

「世代」「世界」「世論」「世の中」

(29) 葉𠂔𠂔𠂔 ヨウ は

「草冠」、「世」、「木」が、縦に並んだ形の文字です。木や草の「葉」のことです。また、薄くぴらぴらしたものも指します。もう一つ大事なこととして、古来我が国では、口から発せられるものを〈ことのは〉と呼んでいました。漢字は〈言の葉〉と当てて、現在の「言葉」になりました。「葉」は、幅広く用いられます。漢点字では「𠂔（草冠）」と「𠂔（世）」で表されて、「木」は、省略されます。

「葉脈」「葉緑素」「針葉樹」「落葉樹」「広葉樹林」「紅葉」「木の葉」「言葉」「葉書」「三葉の写真」「樋口一葉」

「ご報告とご案内」

一 漢点字講習会

本会では2008年度も、引き続き漢点字講習会を行います。

①横浜漢点字羽化の会

2003年から、横浜市健康福祉局、2006年から市教育委員会、市社会福祉協議会のご後援をいただき、漢点字の講習会を行っております。今年は六年目に入ります。

漢点字を学んで、漢字の世界に歩を進めたいと希望される視覚障害者の方、あるいはそのような方が周辺におられる方、そしてそのようなお子様をお持ちの親御様、点訳・音訳活動から漢点字に関心をお持ち下さった皆様は、以下の要領でご受講下さい。お待ち申し上げます。

名称…漢点字講習会

主催…横浜漢点字羽化の会

後援…横浜市健康福祉局、横浜市教育委員会、

横浜市社会福祉協議会

講習の進め方… オリジナルのテキストに従って、通信制を基本に学んでいただきます。隔月にスクーリ

ングを行います。楽しみながら勉強します。

日程… 第一回スクーリング、2008年5月5日（月）、14…00～16…00。当日は、オリエンテーションの予定です。その後、隔月にスクーリングを行って、漢字の世界に一步を踏み出していただきます。

会場…横浜市ボランティアセンター・ボランティアコーナー（横浜市健康福祉センター8F、JR・市営地下鉄・桜木町駅下車）

費用…テキスト代3,000円、漢点字用懐中定規3,090円、会費6ヵ月分1,800円、計7,890円。

お申し込み…4月20日（日）までに、電話03・3613・3160か、Eメールでお願い致します。

②東京漢点字羽化の会

同会では、昨年からは横浜と足並みを揃えて、漢点字の学習会を行っております。この4月から2年目に入ります。新たなご参加を歓迎致します。

名称…漢点字学習会

主催…東京漢点字羽化の会

会場と日程…第一回を、2008年4月19日（土）、18…30～20…30。港区ヒューマンプラザ7F、第1会議室（JR浜松町駅、都営地下鉄浅草線・大門駅、大江戸線・大門浜松町駅下車）。原則として毎月第3土

曜日夜に開催予定。

*何時でもご参加をお待ちしております。

二 『本と人をつなぐ図書館員―障害のある人、赤ちゃんから高齢者まで』

墨田区立あずま図書館の山内薫さんが、右の書籍を発表されました。詳細は本誌をご覧下さい。

山内さんは本誌初発以来欠かさずご執筆下さっており、陰になり日向になり、本会の活動と漢点字の普及にご尽力下さっております。

同書を一読下さい。

三 都立鷺宮高等学校でお話しさせていただきました

前号でご案内致しましたように、去る2007年12月20日(木)18:00から、東京都立鷺宮定時制高等学校で、私岡田が、視覚障害者の生活についてお話しさせていただきました。現在都立の高校では、「奉仕」の間が設けられていて、点字の勉強をなさっておられるとのこと、同校の先生が、点字にも「漢点字」という漢字の体系があることをお知りになって、関心をお寄せ下さいました。誠に丁寧なお話で、先生のご期待にお応えできなかったものと存じますが、このような機会をお与え下さいましたことに、心より感謝申し上げます。

ます。

四 ボランティアセンター再開

昨2007年3月から、耐震・アスベスト除去の工事のために、1年余りの予定で閉鎖されて参りました横浜市健康福祉センターが、この4月1日をもって再開することになりました。それに伴って、市社会福祉協議会の活動も元に復して、ボランティアセンターの



【写真上】講演に聴き入る生徒たち

【写真下】講演中の岡田さん

活動が再開されます。

この間本会の活動は、漢点字の打ち出しはトランスファ福祉サービスの事務所をお借りして、「うか」テープ版のプリント・発送は、ウィリングで、ミーティングは市民活動支援センターのお部屋をお借りして実施して参りました。

4月以降、順次資料を搬入するなどの準備に入り、2006年度までと同様の活動形態に復して参ります。

点字制作室、録音室の自主運営委の活動も再開されます。点訳グループ各位、音訳グループ各位、ボランティアセンター職員の皆様には、相変わりにませずよろしく願い申し上げます。本誌「うか」の音訳を担って下さっている皆様、そして本会の会員各位には、とりわけよろしく願い申し上げます。

五 漢点字訳に着手致します。

・吉村 昭 著「生麦事件」（新潮文庫）… 横浜漢点字羽化の会

・紀田 順一郎 著「日本語大博物館」（筑摩文庫）… 東京漢点字羽化の会
それぞれ漢点字訳を始めます。ご期待下さい。

編集後記

▼暖冬傾向の中でも今年の冬はいくらか厳しく、首都圏でも何度か大雪に見舞われました。とはいえ、昔の冬の厳しさを思い出すと、ずいぶん楽なものです。でも、暖かい春が待ち遠しいですね▼今年の羽化の会の新年会は1月20日、桜木町ワシントンホテルのレストラン・ベイサイドで行いました。このところ毎年同じ会場としています。足の便がよく、みなとみらい地区を見下ろす窓からの景色もなかなか結構なところですよ▼いつもお忙しくてなかなかおいでいただけなかった横浜国大の村田先生を初め、多くのご来賓、会員たち総計26人ばかりが参加され、おいしい料理を楽しみながら、皆さんそれぞれにマイクを回して短いお話などをいただきました▼「報告・案内」ページにありませんように、1年間工事のため使えなかったボランティアセンターが、やっと4月から再開されることになりました。その間活動の場の確保でだいぶ不便を強いられましたが、やっと元の姿に戻れるということは、喜ばしい限りです。

（木下 和久）

E-MAIL（岡田健嗣）： okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL：http://ukanokai.web.infoseek.co.jp

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は4月15日です。

※本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載は固くお断りします。